

メフリバン・アリエヴァ
 ユネスコ親善大使
 ヘイダル・アリエフ基金の会長

カラバフのムゲーム学校



国際連合教育科学文化機関（UNESCO）の決心によってアゼルバイジャンのムゲームは全人類の文化のために卓越した価値のある口承及び無形遺産の傑作の中に入った。ムゲームはアゼルバイジャン民族の基礎を置く文化的価値観の不可欠な部分と思われるアゼルバイジャンではこの決心がこのジャンルで優れた演技者の功績の好評と共に同ジャンルの演技者のユニークな遺産に世界・文化社会の注意を促したいように理解された。

数世紀にわたる歴史を持つムゲームは専門家に呼ばれる東ルネッサンスという時期に繁栄に達した。ギリシャ・ローマの遺産に基づいて、アゼルバイジャンの文化は様々な分野、文学から建築まで、世界文化の黄金のファンドに入った傑作を創造することができた。歴史の以後の時間はムゲームの発展がその要点と意味を変えなかった。ムゲームは今日でもある崇拜の極端世界のように残って、一方で過去の遺産であり、他方で非常に現代的な芸術である。ここでは厳しくて標準的な要求が即興とテーマの創造的発展

の可能性と組み合わせている。

ムゲームのユニークな文化は豊富である哲学的・音楽的・文学的な根拠で発育した。ムゲームの演技者はしばしば聴手に、人々を永遠の真理に親しませて、心の平和を見つける機会を与え、世代から世代へ伝えられるべきあるアルカイックで魔法のコードの担い手として知覚されている。

現代人にとっては過去の文化遺産の知覚中の創造的な始めがいつも秘密の秘密であるに決まっている。如何なる生気のない純理論的な書物で

もこのジャンルの生命ある織物のニュアンスを伝えることができない。ムゲームの演技者は、この秘密が暴かれた一流の人のようで、出演するたびにライブ音楽とライブ詩の常緑樹をデモする能力がある。

ムゲームは文化の総合的な種類としてアレゴリーとシンボルがいっぱいのアゼルバイジャンの古典の詩に基づいている。ここで比喩的表現と神秘的な意味が組み合わせて、詩的な各行の文脈、その真実の意味は東洋哲学、符丁語と比喩をよく知っていて、秘密にされた行の意味と知識

ハリ・ブルブル国際音楽フェスティバル(アグダム、1989年)



のない人の隠されたことを解読できる者にだけ開かれる。子供の頃からすべてのムガームの演技者には最もムガームの音楽要求に近くてガゼーリ（詩）を書く時よく使われる作詩の魅惑が編成する。ムガーム演技者の中でだれも様々な詩人のガゼーリがいくつ暗唱して知っているのか具体的に言えないかもしれないけれども、どちらか一方の話題を反映する必要性が出てくる時に、頭に適当な詩行がぜひ浮かぶだろう。

ムガームはアゼルバイジャン人の作曲家にとって永遠に靈感の無尽蔵の起源である。古典的なひな型を基礎として作られた交響曲のムガームは西と東の両方で多くの国

のオーケストラに首尾よく演奏されている。しかし、ムガームの空間は現代の作曲家の創造的な探求と解釈のための本当に無限な源のようである。ムガームに関してよく知っている人はそれを一見したところムガームの直接引用から全く遠くあるいろいろな作曲で“キャッチ”することができる。

アゼルバイジャンにおいてはソロ出演のためにできているムガームと同様にインストルメンタルのムガームが広く普及している。インストルメンタルのムガームを演じるバンドの編成は異なる場合があるのだが、原則としてそれは伴奏だけのためにある編成より遥かに広い。インストル

メンタルのムガームがすべての多様性と豊富さでぬきんであっても、ムガームのトップになっているのはソロ演技である。正にソロ演技によって聴き手がムガームの真正の鑑識者の意見によると音楽瞑想の要点である“星の世界へ旅行”のスーフィ神秘教を捕えることができる。

一般的にアゼルバイジャン人はムガームを歌う歌手を“ハネンデ”と呼んでいる。ハネンデの歌うことは一般的に音楽家の伴奏を伴っている。国民楽器を演奏するこの音楽家バンドの編成は異なっている：3重奏から（タール、ケマンチャ、デフ）全オーケストラまで。

アゼルバイジャンにおい

IRS カラバフ

有名なタール演技者であるミルザ・サディーのグループ



てはムガーム演技者のいくつかの公認された学校が存在している。このジャンルは国の全部の地方に普及している。ムガーム創作の重要な中心が自分の独立した学校を創造したバクー、シャマフ、ギャンジャ、ナクチェワーンとシュシャになっている。特別な関心をよせるいわゆるカラバフのムガーム学校はたいていシュシャに形成された。

アゼルバイジャンムガームの最初の記録は1902年から登場され始めた。アゼルバイジャンムガームの録音のパイオニアは“グラマフォーン”という英国会社と“スポ

ーツ・レコード”というドイツ会社と“パテ・レコード”というフランスの会社だった。1913年から始めてこれ等の会社はリガ、モスクワ、ワルシャワ、サンクトペテルブルク、キエフ、トビリシ、バクーにおいて自分の固定的な代表部を開きつつあった。それに加えて、アゼルバイジャンのムガームが“コンサート・レコード”、“モナーク・レコード”、“エクストラフォン”、“グラマフォーン・レコード”のようなロシアの会社と“プレミエール・レコード”というハンガリーの会社によって記録された。

ソ連の時代に貴重な録音の一連がアプレーレフとノギンという工場によって登場された。

この録音の大部分がアゼルバイジャン国立録音の公文書館に収集されている。または、それらのいくつかがアゼルバイジャン国立音楽文化博物館に守られる。アゼルバイジャンムガームの古い録音の一連もブリテン国立図書館の録音公文書とほかの公文書にもある。

アゼルバイジャンではこの古い録音を復興のために強い活動を行ったのである。なにかんづく、20世紀初めのレコ

ードが復古され、デジタルフォーマットに変換された。これらのレコードが以前には発行されなくて、単一のコピーに記録され、普及に向けなかったのである。

第一次世界大戦とロシア帝国の崩壊、その後ソビエト連邦の成立のせいで出来上がった政治的な激変によってムガームのジャンルが深刻な危機につながってしまった。ソビエトイデオロギーにとってムガームはプロレタリアートに縁の遠くて、生涯を終わった芸術だと思われた。ムガーム演技の指導的な楽器であるタールさえ攻撃から逃れられなかったのである。アンダーグラウンドのレベルぐらい追いつかれたムガームは公式文化的な生活に戻ることができ

た。しかしながら、ソ連時代にカラバフ学校の芸術名人の最初で一流のスタジオ録音は30-50年代になっている。これらのレコードはハン・シュシンスキー、ズルフィ・アデゲザーロフ、セイド・シュシンスキー、アブリファート・アリエフ、ムタッリム・ムタッリモフ、ヤグーブ・マメドフ、イスラム・ルザーエフ、アリフ・ババエフ、ムーシュド・マメドフ、ガディール・ルスタモフ、スレイマン・アブドラエフの声を持っている。

最後に、演技者の3番目のバンドはもう20世紀後半に認識を獲得した。このバンドのレコードにはワヒード・アブドラエフ、サハベット・マメドフ、ザヒード・グリエフ、

ガラハン・ベーブトフ、マンスム・イブラギーモフ、サビル・アブドラエフ、フェクルズ・マメドフのようなハネンデが入っている。

ある民族は優れた天才の生まれに何世紀も用意をしなければならぬと言われている。彼の誕生のころにはこれから聞く子守唄、善と悪の差別をつけられるように学ぶ物語、祖先の音楽遺産に親しませる歌が用意されるべきである。明らかであるのはもし天才に恵まれているある民族は彼を理解することができなければ、この民族が人生の終わりまで自分を実現することができないのみならず、まったく請求されなくなる可能性があるということだ。そういう観点から運命はカラバフのハ



ネンデ歌手に対してけっこう好意的だった。この人々はつまり彼らの偉大な才能を理解できる環境で生まれたのである。彼らのカラバフにこそ生まれたことは一生を運命づけたわけである。彼らの生まれたところにはほとんどみんなが歌を歌って、美声と音楽的な才能の価値をよく知っていた。山地のか低地のカラバフに、シュシャかアグダムにかかわらず、ムガームの博識家として演じて、いざという場合にどんな民俗曲でも歌えただけではなくて、このジャンルの真の鑑識者の環境を形成して、ムガーム名人の周りに特別な崇拜の畏敬を作った。

ムガームは人の靈魂を彫塑して、形成する。カラバフにそれは相互関連のプロセスだった：ここで自然そのものが音楽を含め、美しいであるすべてに対して極めて感受性の鋭い靈魂を形成していた。自分の民族の音楽文化を育成しながら、カラバフのムガーム学校の代表者は再び同国人の意識に影響を及ぼしていた。このところの自然を刺すような美しさ、和声と平静が長年カラバフ出身の演技者のみんなに養成されたユニークな音楽文化に鏡ように反映された。

カラバフのハネンデ歌手の大勢はシュシャに生まれ

たのである。シュシャのテーマ、難攻不落の要塞と道徳的な城塞としてシュシャの様子がアゼルバイジャン民族の文化的な聖物として彼らの創作の一定のライトモチーフで鳴る。

シュシャ出身者の各はシュシャの歴史を様々なカラバフの年代記からだけ知られていなかったのである。彼らにとって、このすべての

“カラバフにつきの物語”（“カラバフ・ネグメレル”）がただ手書きの部厚い本として知覚されなかったのである。彼らにとってそれは今日と昨日の人生の奪うことのできない一部になっていたわけである。歴史のエピソードの多くが細かい歴史的な事件を守れ、この所の純粋な歴史の詳細を反映しながら、絶えず世代から世代へ渡され、口頭で語り伝えられた。“カラバフ・ネグメレル”は平日に生きていた建策的な記念碑の生き生きした歴史であって、そこで歴史的な真実、過ぎ去った日と現在日の現実が調和的にお互いに相補っている。この所の歴史と自然はカラバフのムガーム学校の主なテーマの一つであるカラバフのテーマを生み出したのである。“カラバフ・シケスタシー”という有名なムガームがいつもカラバフ演技者の特有な名刺である。

シュシャは世界に多くの音楽家をあげた。彼らの中に大勢はエセーニンというロシアの詩人の有名なフレーズに応じてシュシンスキー（シュシャの人）という芸名を選択した：“詩人ではなかったら、シラズ出身者ではないに決まっている。歌手ではなかったら、シュシャ出身者ではないに決まっている”。シュシャは世界に優れた歌手、演技者、作曲家と音楽学者を与えただけ彼らが特別な演奏技術の百科事典を編集することができたのに。

シュシャは実際にいつも東洋の音楽コンセルバトワールと思われたのである。ここに至るところから有名な歌手を聞くか歌の練習をするために音楽愛好家が集まった。しかし、この町は音楽家だけで名高くなかったである。シュシャと呼ばれる現像を生み出すためにどのくらいユニークな天然の要素が具体的な人の功績と一緒に合流しなければならなかったらろう。自分の手で作った楽器に、彼らの建てた素敵なホールに、彼らに書いた美しい詩に以前に未知の音楽が生まれるためにこの町にこそどのくらい異なる職業の素晴らしい人が生まれなければならなかったらろう。この町がアレクサンドル・デュマのコーカサスへの旅行に関する本によく反映さ



メシャディ・ジャミル・アミロヴ



ハネンデムハンマド・
ファルザリエヴのグループ



メジド・ペーブドヴ



れている。その本にはその時カラバフの支配者であった詩人のナタワンの特性が載せられている。

この地方はまた清くて透き通った泉で名誉を得て、その中で最も有名であるイサ・ブラグは大勢にシュシャのシンボルと思われた。直接天空に向かっている山々が驚くほど美しい高原を囲んで、野外で音楽に興じるために音響で先例のないホールを建設した。山系に囲まれた“ジディール・ドゥジ”と呼ばれるこの高原は多くの有名な歌手をたくさん見たり聞いたりした。しかし、どこへでも顔を出す男の子はこの自然の奇跡と“悪戯”する機会を逃さなかったのである。ちょうどムガム歌の基礎を悟る響き渡る子供の声は毎日様々な山越えから聞こえ、周囲の山々から遠く響く木霊を返して合併

した。

1987年においてここで“ハリ・ビュリビュリ”という国際ムガム祭典が行われた。この祭典が山に生えるユニークな花に因んで命名された。同祭典のおかげでどんなに若い天才の星座が現れたね！1992年にアルメニア人によるシュシャ町の占領のせいでムガム芸術の上昇星の人のそれぞれが難民になってしまった。今日では難民キャンプにこそこの祭典の受賞者が憂鬱と悲嘆に暮れて追放の暗い日後、彼らはもう歌わないことを教えていただく。

“我々は山の住民で、平地に歌うことができないだ。我々の靈魂がシュシャに残ったのである。我々は溪流や泉、山頂の透明な空気、ジディール・ドゥジに鳥の鳴き声の点呼のなしでどうやって歌おうか？”。これらの告白に

答えがあるのだろうか？一つ残っているのは自分の弱体性を理解することとこの子供たちの魂と心の中で世界の知覚の深さでぞっとするということだ。

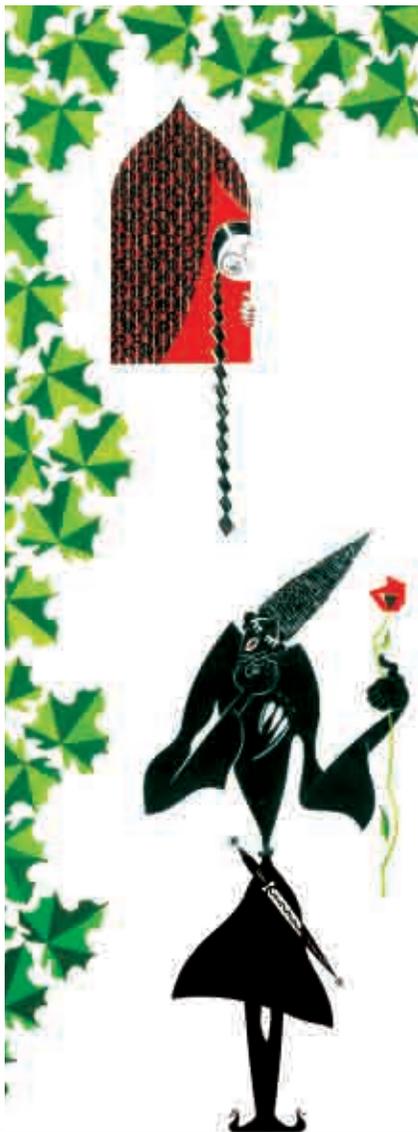
不文律によるとシュシャの音楽コレクションが多数のクラスに分かれたそう。最初と思われたシュシャのメジリス（会議）は優れた音楽家が招待され、貴族が参加したメジリスだった。それと共に歌手がこれまで聞こえたことのない詩を制作することは特別な価値があった。彼がこの詩を古代な原稿で見つけたのか、それとも現代詩人の誰かに書かれたのかにかかわらず要求が高かったのは詩の質に対してだけだった。こういうメジリスには踊ることは受け入れられなくて、ムガムがすべてのニュアンスと移行を使って演じられ、絶対にダン



ス曲が聞こえなかったのである。

2等級のメジリスは副次的ではなくても、そんなに優れた歌手の招待するつもりであった。ここでも一般的にムゲームが演じられたのだけれども、ムゲーム演技の2時間後ある民謡を歌うか、何人かに踊るのが許可された。

メジリスの3番目のクラスは楽しい時間を過ごしたい人々から成っていた。それはいわゆる遊興のメジリスで、こ



こには重要な音楽の場所柄でなくて、いわゆる楽しい曲が非常に多く演奏された。自尊心があるハネンデ、原則として、こういうメジリスを訪れなかったのである。しばしば結婚式もこういう風なメジリスに似ていた。ここでは歌われる曲のほとんどはテンポが速くて、旋律的で、そしてわざとダンサーが招待された。

このような分類の全条件性で本当の一流のメジリスに対する高い要求こそ長年音楽家に前例のない演技レベルを守ることを可能にした。聴き手もこのレベルに応じて相当したのだ。基本的にムゲームの真実の鑑識家のこの会議はジャンル自身が冷凍ではなく、民俗芸術のいつも活発なフォームに残りながら、改善して、発達するを可能にした。

一般的にシュシャは東洋のまたとないコンセルバトワールとして名誉を得た1等級のメジリスのおかげでこそ有名になった。アゼルバイジャン民族の辞典にこういうことわざが訳あって入ったのである：シュシャに子供達が“セイギャブ”というムゲームのモチーフに泣いて、“シャフナーズ”というムゲームのモチーフに笑っている”。

作家のアブドラギム・アベルディエフが示したのは19世紀後半にバクーかシャ

マフかアシガバートかテヘランかイスタンブールかにどんな音楽家に会っても、その中に必ずシュシャから来た音楽家がいるに決まっている。彼らは全東に特有の音楽流行を決定して、四方八方から自分の声と技能の評価を受けたい歌手がシュシャに集まっていた。長年わたってすでに有名なハネンデになって、彼らはガジ・グセイン、サデグジャー、ミルザ・ムフター、ジャッバル・ガラグデオグリ、それともカラバフのムゲーム世界の大切な権威者の誰かが彼らの声に関して言ったことを引用していた。

アゼルバイジャンにおける最初の石油ブームはムゲーム芸術の発展にもけっこう影響を与えた。バクーの石油採掘業者のうちには文芸の保護者によって行われた“オリエンタルナイト”が非常に好評を博した。最初のナイトがシュシャ劇場において開放された。アゼルバイジャンの別の町に、なかんずくバクー行われた“オリエンタルナイト”においてカラバフのムゲーム学校の代表者の演奏はその時代の音楽生活で顕著なイベントとなった。まさに“オリエンタルナイト”をきっかけにムゲームの真実の鑑識者を含む伝統的な音楽コレクションが、この芸術に加わりたいみんなを集まる、ムゲーム



コンサートのシステムに変化する時代が始まった。

20世紀間カラバフのムゲーム学校は音楽世界に多くの新たな輝かしい音楽家を与えた。ナゴルノ・カラバフ戦争はハネンデの練習に固定した相続を打ち砕いてしまった。野砲が話している時、ミュージックが黙っているとされている。カラバフのハネンデは黙っていないで、彼らは歌っている。しかし今日では、彼らの歌に痛み、悲哀と苦しみが聞こえる。かつて偉大なジャッバル・ガラグデオグリーが歌った通り：“天国にいても、カラバフなしでこの天国どうしようか私？”

世界がグローバル化している。このグローバル化している世界に高すぎるスピードで種々の変更が起こっている。前代未聞の人間流れの移動性、ほとんど瞬間的な通報送信の可能性、世界の外観を変える新しいテクノロジー：このすべてはテロリズムの高まる威嚇と天然激変を背景にして起こっている。それほど強い変更を絶えず受ける世界には人間が砂粒のようだ。グローバルイズムの哲理も、反グローバルイズムの哲理も世界に失われたハーモニーを返せない。衝突や文明のバランスについての論断と同じく。しかし、ちょうどこの時代に我々は一緒に、伝統のパラダイム

と縁がある我々の以後の発達のある基礎を形作らなければならないのである。伝統の力だけによって、それぞれの文明、各民族の文化のアルカイックな元型の保護を通じて我々は文化の多様性、伝統の保護と増加が可能である世界に達することができる。つまりユネスコ条約は口承及び無形遺産の保護の目的にかなっている。

国際連合教育科学文化機関（UNESCO）の決心によってアゼルバイジャンのムゲームは全人類の文化のために卓越した価値のある口承及び無形遺産の傑作の中に入った。ムゲームは今日でもある程度の現像のように残って、一方で古い伝統であり、他方で非常に現代的な芸術である。ムゲームのユニークな文化は豊富である哲学的・音楽的・文学的な根拠で発育した。ムゲームの演技者はしばしば聴手に、人々を永遠の真理に親しませて、心の平和を見つける機会を与え、父から息子へ伝えら

れるべきあるアルカイックで魔法のコードの担い手として知覚されている。ムゲームの根本的な学校はバクー、シャマフ、ギャンジャ、ナクチェワーンとシュシャになっている。カラバフのムゲーム学校は基本的にシュシャに形成された。シュシャは実際にいつもコーカサスの音楽コンセルバトワールと思われたのである。20世紀間カラバフのムゲーム学校は音楽世界に多くの新たな輝かしい音楽家を与えた。ナゴルノ・カラバフ戦争は大いに伝統とハネンデの練習に固定した相続を打ち砕いてしまった。野砲が話している時、ミュージックが黙っているとされている。カラバフのハネンデは黙っていないで、彼らは歌っている。しかし彼らの歌には痛み、悲哀と苦しみが感じられる。かつて偉大なジャッバル・ガラグデオグリーが歌った通り：“天国にいても、カラバフなしでこの天国どうしようか私？”。